

経済学部の教育目標

1. 経済学の分析能力を修め、産業社会で活躍する人材育成する
2. 経済学の専門知識を身につけ、日常生活を豊かにする教養を培う
3. 経済学を総合的に修め、市民社会の形成に参加する自律した人間を育成する

経済学部の求める学生

1. 経済学の専門知識を修め、製造業、銀行・証券業、流通業などの産業社会で活躍することを目指す学生
2. 教養豊かな社会人になることを目指す学生
3. 国際的視野と地域視点を持って、国際社会や地域社会で活躍する学生、とりわけ北海道の産業の発展ならびに福祉・文化の向上に貢献することを目指す学生

エッセイ

ライデンのシーボルト会

経済学部 准教授 白石 英才

縁あってこれまでオランダに約8年、ロシア(サハリン)に約2年滞在する機会を得た。その間、現地の人のみならず在留邦人とも数多く知り合うことができた。そしていずれの土地でも感じるの海外在住の日本人の連帯力と向学心の強さである。2010年10月から1年間、本学の在外研究員として勤務したライデン大学(Rijksuniversiteit Leiden)があるオランダ西部の都市ライデンでもその認識を新たにした。

ライデン大学は7学部約2万人の学生と約4千人の教職員を抱えオランダ最古の歴史(1575年創立)を誇る伝統校だが、オランダで唯一日本学科を擁する大学として日本とのつながりも深い。ライデンの町自体も古く、日本研究で名高いフィリップ フランツ・フォン シーボルト(1796-1866)がオランダ帰国後に研究生を送った町としても知られる。シーボルトが日本で収集した動物・植物の標本や民具などの膨大な資料はライデン大学のみならず、ライデン市内に点在する博物館や植物園などの研究機関に分散して保存されている。またシーボルトがかつて

住んだ家は現在シーボルト記念日本博物館として一般公開され、シーボルトの日本コレクションも一部展示されている。



ライデン大学の本部棟。学位授与式や教授任命式が行われる。

そのシーボルトの名を冠した研究会がライデンにある。「シーボルト会」は1996年に現ライデン大学名誉教授の村岡崇光氏（ヘブライ語研究）が、ライデンに来る日本人研究者の交流と留学生のサポートを目的として設立したという。現在の登録会員数は280名で、幅広い分野の在オランダ日本人研究者が毎月開催される研究会で自らの研究テーマについて発表する。会に参加する研究者の多くは大学院生や短期のプロジェクト契約者（いわゆるポスドク）あるいは私のような在外研究者であるが、研究者以外の在留邦人にも門戸を開放している。現在、会の幹事を務めるのはライデン大学文学部歴史学科の博士課程で日本現代史を専攻する有田千枝さんで、会場も有田さんの自宅を借りている。私も帰国前の2011年9月にこの会で発表する機会を得たが、準備にあたり有田さんにまず注意されたことが「専門の異なる研究者が集まる会だからといって発表内容を一般向けに簡略化しないよう」ということだった。有田さんによると会員は強い向学の念を抱いて参加するので、発表者は専門性を十分に発揮して会員のそうした要求に応えなければならないという。そのためには会員が発表内容を予習できるよう参考文献や関連サイトの情報を事前に周知するという念の入れようだ。聞けばこれまでも過度に簡略化した発表をしてしまい、会のご意見番と目される歴々から厳しいコメントを受けて泣かされた発表者もいたという。そういう話を散々聞かされたので私は戦々恐々として発表当日を迎えた。

ライデンは古い町なので市内の随所に歴史的建造物があるが有田さんの自宅も築200年は優に超える、中庭を持った瀟洒な集合住宅の一角にある。居間は8畳ほどのスペースだったと思うが、そこに何と30人近い人が集まった。私はライフワークとしているサハリンの先住民民族ニヴフ人の言語であるニヴフ語の記述と記録の活動についてスライドを使って発表したのだが、最前列の聴衆は私の足元に体育座りをするほどで足の踏み場もなかった。

さて発表を始めるとスライドを2、3枚回すたびに元気のいい大学院生を先頭に聴衆から次々に質問が飛ぶ。この機会に何か一つでも知識を得て帰ろうという知識欲旺盛な聴衆のそうした熱気に、最初は緊張で硬かった私の発表態度も次第に会の自由闊達な雰囲気巻き込まれていった。質問の内容は多岐にわたり、ニヴフのような少数言語（話者は推定で50名）を研究することの意義から、フィールドワークにおける対面調査時のマナーといった実務にかんすることまで及んだ。余談だが私は「言語学者は身なりに無頓着な人が多いので、話者と面会するときは自分でも特に注意している」と言った後で、発表時に自分の社会の窓が開きっぱなしだったことに気づいて大いに赤面するオマケもついた。

発表後は各自が持ち寄った酒と料理を楽しみながらの



ライデンで最も美しい運河とされるラーベンプルフ (Rapenburg)。旧シーボルト邸もこの運河に面している。

歓談の場となるのだが、それがオランダで研究生を送る会員同士の貴重な情報交換の場となっていることは言うまでもない。それにしても理系から文系までこれだけ幅広い分野の研究者が毎月のように集まる研究会というのは日本国内にはちょっとないのではないだろうか。しかもそれぞれの出自や出身母体、所属研究機関が異なるので会員間に仕事上のしがらみのようなものはほとんどない。したがってここでは（オランダ人も含めた）職場での悩みや帰国後の見通しについて比較的自由にそれぞれが思うところを吐露できる。また私のようにすでに帰国した会員も会のメーリングリストを通じて会の活動や帰国した他の会員の動静に触れることができる。このようにライデンのシーボルト会はオランダで研究生を送る、あるいは送った経験のある研究者に大変貴重なネットワークを提供している。

ライデンの旧市街に位置する有田さんの家から旧シーボルト邸までは運河沿いに徒歩3分ほどの距離である。ライデンにこれだけの数の日本人研究者が集い、シーボルトの名を冠した研究会で切磋琢磨する時代が来ることを当のシーボルトは想像できたのだろうか。

【関連サイト情報】

旧シーボルト邸（日本博物館）：
<http://www.sieboldhuis.org/jp/>

シーボルトがオランダに持ち帰った植物が現存する
ライデン大学植物園：
<http://www.hortusleiden.nl/>

シーボルトの日本コレクションが収蔵・展示されている
オランダ民族学博物館：
<http://www.rmv.nl/>

サハリンの先住民民族ニヴフについて（白石のサイト）：
<http://ext-web.edu.sgu.ac.jp/hidetos/>

経済学部の教育活動

1. 今年度の経済学部の主な活動

経済学部20周年事業

今年度は、本学に経済学部が設立されて20年となる節目の年です。それを記念して4つの記念事業が行われました。

「北海道農業とTPP」

講演とシンポジウム



7月26日(火)に「北海道農業とTPP」と題してキヤノングローバル戦略研究所の山下一仁氏、北大大学院農学研究院教授の

飯沢理一郎氏、北海道大学名誉教授の小林好宏氏を招いて、講演とパネルディスカッションが行われました。

講演の講師は、キヤノングローバル戦略研究所の山下一仁氏、パネルディスカッションのパネラーは北大大学院農学研究院教授の飯沢理一郎氏、北海道大学名誉教授の小林好宏氏でした。今回は、日本経済論、社会政策の講義の時間を利用して開催され、この講義を受講している学生の他に、一般市民約20名が講演とパネルディスカッションを聴講しました。

山下氏はTPPに参加することに賛成の立場から、農業が国際化の必要があること、そのために農業の規模の拡大、価格支持政策から一定規模以上の企業的農家に対する直接支払制度への移行、減反政策をやめることなどにより、米の価格を下げ、米を輸出可能にすることなどを提案されました。また農地法の見なおしなどに触れられました。北海道農業については生乳の海外への輸出、野菜の輸出の方向性を示されました。

この講演後、パネルディスカッションが行われ、飯沢教授から「WTOではなく、なぜTPPなのか」、「米などの輸出は、相手国の嗜好の問題もあり、簡単にできるのか」、「財政負担型の直接支払いというのが、EU、アメリカと日本では状況が異なるのではないか」などの質問が出されました。また小林氏からは、TPPに参加する意義について述べられた後、「高齢化と担い手不足をどう解決するのか」、「農業に競争力がつけられるのか」などの質問が出されました。これに対し、山下氏から回答がなされた後、両氏からそ

れに対する再質問がありました。最後にフロアに参加した2人の市民から質問が出され、議論が盛り上がった中で閉会となりました。

「ジンバブエの経済・文化・社会」

講演と舞踊

7月25日(月)に経済学部20周年記念企画の第1弾として「ジンバブエの経済・文化・社会」と題して、小樽出身でジンバブエ在住



の高橋朋子さんによる講演とジンバブエの子供たちの舞踊の公演が行われました。

高橋さんは、歌手のボブ・マーリーの音楽に魅せられ、それがきっかけで1986年からジンバブエに在住し、現在では現地にジンバブエの伝統音楽を演奏するミュージックプロダクション「ジャナグル」を開設し活動しています。

高橋さんは講演でアパルトヘイトなどのジンバブエの歴史、日本では考えられない激しいインフレーション、貧困の現状を語られました。

その後、ジンバブエの子供たち3人を中心とした舞踊の公演が行われました。ジンバブエの独特の楽器、太鼓の音楽をバックに子供たちがお祝いの時の踊りなどを披露した。ダイナミックな踊り、頭にかごをのせたままの踊りなどが披露され、聴衆を魅了しました。また日本語の「海」を歌いながらの踊りも行われました。

「講演と音楽の夕べ」

9月1日に帯広市の市民文化ホールで「講演と音楽の夕べ」が経済学部20周年記念事業の一環として開催されました。

前半は本学名誉教授の高懸雄治氏による講演でした。「チェ・ゲバラとオードリー・ヘプバーンー戦争・貧困・平和ー」と題



して、貧困の撲滅のために革命を志したチェ・ゲバラの生涯を、広島原爆資料館を訪ねたこと、オートバイで南米中を見て回ったエピソードなどを話しながら、紹介されました。その後、戦時中ナチのレジスタンスの手伝いをしたり、晩年は、ユニセフ大使としてほとんど無給でソマリアなどの発展途上国の子供たちの悲惨さを改善しようとしたり、平和の大切さを訴えたオードリー・ヘップバーンの生涯を述べられました。この二人の生涯を通して平和の大切さ、貧困の撲滅を訴えられました。

後半は、札幌交響楽団コンサートマスターの大平まゆみさん（ピアノ伴奏 浅井智子さん）のヴァイオリン演奏が行われました。

講演、音楽とも好評で、終わった後に聴衆から惜しめない拍手が送られました。

「人口減少時代における北海道」

講演とシンポジウム

11月18日（金）に講演とシンポジウムが開催されました。まず明星大学教授、一橋大学名誉教授の関満博氏が「人口減少時代の市町村のまちづくり」と題して講演を行いました。この講演では東日本大震災の状況、過疎にある村でどのようなまちおこしが行われているかを紹介しました。

シンポジウム「人口減少時代の北海道のまちづくりはどうあるべきか」では、宮谷内留雄蘭越町長から人口5千300人の蘭越町で、町の運営がどのように行われているかが説明された。ブランド米としての蘭越米を販売していること、町営バスやハイヤーに補助金を出すなどしてまちの交通サービスを確保していること、老人や子供に対する医療、福祉政策、また財政維持の為に人員の削減、人件費の圧縮などの努力が話されました。

インタラクティブ研究所の安田睦子さんからは、人口減少地域において高齢者に視点が向けられるが、むしろ現

役世代に目を向け、その人たちの雇用の場、若者が活躍できる場、遊ぶことができる場が必要という話をせたな町と今金町の農業生産者7人で行った「山の会」を例にとり紹介されました。

その後、討論が行われました。参加者は学生を含め、3講時に200名、4講時に100名程度が参加されました。



経済学部特別講義「観光とスポーツの経済学」

経済学特別講義は、生きている経済の現状を学生に認識してもらうために、一つのテーマのもとに、主として経済の現場で活躍されている社会人の方に来ていただいて、その経験や知識をもとに学生にお話しいただく講義です。多くの場合はリレー講義の形式で行われます。これまでは、北海道経済の財政や観光、産業の問題を取り上げたり、証券会社の札幌支店長や日銀職員、金融アドバイザーの方に金融のお話をさせていただいたりしてきました。学生の他に一般の社会人も聴講できます。

過去5年間のテーマは、以下の通りです。

06年度 「北海道の産業とその課題」

07年度 「証券市場論」

日	講師	略歴	テーマ
4月15日	平澤 亨輔	札幌学院大学経済学部教授	ガイダンス、この講義のねらい
4月22日	竹谷 千里	北海道経済部観光局国際観光担当局長	北海道観光の現状と課題
5月 6日	佐藤 郁夫	札幌大学経営学部教授	観光のマーケティング
5月13日	駒谷 信幸	長沼グリーン・ツーリズム協議会会長	長沼町のグリーン・ツーリズムについて
5月20日	ロス・フィンドレー	ニセコアドベンチャーセンター代表	観光の経済効果（ニセコを事例として）
5月27日	高木 晴光	NPO法人ねおす理事長	エコツーリズムと自然学校という仕組み
6月 3日	河西 邦人	札幌学院大学経営学部教授	地域資源を活用する観光戦略
6月10日	中井 和子	中井景観デザイン研究室代表	旅と観光の景観論 ―景観・デザイン・まちづくり―
6月17日	小川原 格	(株)藪半代表取締役社長	運河保存運動が小樽にもたらしたもの～保存運動から雪あかりの路まで～
6月24日	佐藤 拓	北海道日本ハムファイターズ事業本部	スポーツコミュニティ
7月 1日	児玉 芳明	株式会社北海道フットボールクラブ相談役	スポーツはすばらしい
7月 8日	坂本 和昭	坂本ビル・坂本商事代表取締役	まちづくりマジックの種明かし
7月15日	かとう けいこ	シーニックバイウエイ支援センター広報部長	着地型観光メニューを地域でどう作りあげ、継続していくか
7月22日	中鉢 令兒	北海商科大学商学部教授	国を救った観光産業 観光先進国 シンガポールの観光政策
7月29日	平澤 亨輔	札幌学院大学経済学部教授	美瑛町の観光と農業 まとめ

08年度 「北海道の金融と財政」

09年度 「スポーツ、文化イベントと観光の経済学」

10年度 「くらしと金融」

今年度の経済学特別講義は、「観光とスポーツの経済学」というテーマで4月15日から7月29日まで開講されました。

今回の講義の狙いは、北海道にとってこれからの重要な観光とスポーツに視点をあて、北海道において観光をどう位置づけるか、具体的にどんな観光が行われ、それがどんな効果を上げているのか、どんな点を重視すればよいのか、また日本ハムやコンサドーレなどのスポーツは、いまどんな状況にあり、それは経済にどんな影響を与えているか、を14人の講師の方にお話しいただきました。講義も興味深いものが多く、ニセコ、小樽、長沼など具体的な事例も豊富でした。社会人も多く参加し、アンケートの結果も大変好評でした。

来年度は、北海道の地域金融に焦点をあてた講義を開講する予定です。



外国書講読Cで中国を訪る

外国書購読Cは、外国語の文献を読むとともに、現地を訪ねることにより、その国の経済・社会の理解をより深めることを目的とした科目です。

この講義の中で9月7日から11日まで、4泊5日の日程で北京に研修旅行に行ってきました。参加した学生は7名です。研修の目的は、北京農学院の学生たちと交流し、「万里の長城植樹活動」を行うことでした。北京農学院の学生二人が3日間、朝8時から夜8時までびっしり私達に付き合ってくれました。英語、日本語、中国語、さまざまな言語を駆使して十分とは言えないまでも交流は出来たと思っています。万里の長城、故宮博物院、天安門広場、人民大会堂等々北京の名所を案内してもらいました。残念ながらもう一つの研修の目的であった「万里の長城植樹活動」は、北京市の指示で夏休みの間にキャンパス内の総ての建物の耐震工事を行わなければならないことから準備ができず、行うことができませんでした。次回の中

国研修では、是非とも北京農学院の学生達と共に「万里の長城植樹活動」が行えるよう願っています。

インターンシップ

今年度の学生のインターンシップの派遣先は以下の通りです。

- 日本労働組合総連合会北海道連合会
- 北海道銀行
- (株)リクルート北海道支社
- 長谷川産業(株)
- 税理士法人さくら総合会計

なお本学部のインターンシップでは、2008年度入学生以前のカリキュラムの科目「インターンシップ」は、企業の実習経験にもとづいて研究報告をすることになっていました。2月13日(月)にインターンシップ報告会が行われました。

中村寛輝君が日本労働組合総連合会北海道支部でのインターンシップの経験をもとに「ワーク・ライフ・バランスの実現」というテーマで報告しました。ワーク・ライフ・バランスとは仕事と生活の調和を図ることで、日本人にありがちな仕事中心の生活を見直そうというものです。

中村君は現在の日本の失業率の高さ、育児休暇中に給与が出ない、男性の育児休暇の取得率が低いなどの問題を述べた後、ワークシェアリング(個々の労働者の労働時間を短縮して多くの人の雇用を確保すること)によりワーク・ライフ・バランスが達成できるという意見を述べました。

卒業論文発表会

2月17日(金)に卒業論文発表会が行われました。

湯川教務委員長の司会で進められ、

- ・ワールドカップが日本へ与えた経済影響
- ・アメリカにおける社会保障の現状と課題
- ・なぜ格差社会は生まれたのか

などのテーマで報告が行われ、参加した教員、学生との間で質疑応答が行われました。

今回は卒業論文発表会を個別のゼミナールで行うところがあったことなどから、参加者が少なかったのが残念でした。

ゼミナール活動報告

加藤ゼミナール、鏡味ゼミナールがSCANに参加

2011年12月10日(土)に加藤ゼミと鏡味ゼミの学生が、道内の大学生が参加・運営する合同研究報告会、SCAN(スキャン)に参加しました(会場:釧路公立大学)。加藤ゼミは「介護システムを通じた農村地域の活性化」というテーマで、鏡味ゼミは「中国経済をモデルに北海道の地域再生・復興を考える」というテーマでそれぞれ研究報

告を行いました。

SCANは釧路公立大学の学生を中心として、2010年から始まった取り組みであり、企業等に協賛や支援を募りながら、学生自身が主体となって運営しています。

2011年度は札幌学院大学のほか、釧路公立大学、北海道教育大学釧路校、北海学園大学、札幌大学から16グループが参加しました。

平澤ゼミナールが長沼町に調査

平澤ゼミナールが8月10日、11日と1泊2日で長沼町を訪れ、長沼町のグリーンツーリズムについて調査しました。長沼町では、道外からの修学旅行生を受け入れており、毎年4000人が長沼町を訪問しています。また直売所が各所にあり、毎年4億円を超える売上高を上げています。このほかに農家レストランや構造改革特区の一つである「どぶろく特区」を利用してどぶろくを造っている農家もあります。

今回は町役場、農家、農家レストラン、どぶろくを造っ



ている農家などをヒアリング調査しました。

大場ゼミが工場見学

1月22日(日)にゼミ活動の一環として、キリンビール千歳工場の見学を行いました。

大場ゼミでは労働経済学の基本文献を皆で読み、「働くこと」が経済学でどのように扱われているかをこれまで学んできました。働く現場としての工場では、ビールの原料(麦芽・ホップ)を味わい、製造工程や缶・びん・樽詰め・印字検査などを見学し、そこで働く人がどのような作業に従事しているかについて聞くことができました。



2. 学会賞授賞・資格取得

本学部の北村 紘准教授が2011年度の日本応用経済学会の奨励賞を受賞

本学部の北村 紘准教授が2011年度の日本応用経済

倉田先生の最終講義

1月27日(金)に倉田 稔 教授の最終講義が行われました。倉田教授は、小樽商科大学を退職されたあと、2009年度から本学部で3年間経済学史を担当されました。

最終講義は「現代世界経済の本質と秘密」というテーマで、現在の世界経済を教授独自の視点で説明されました。

まずグローバル経済におけるマネーの重要性、影響力の増大を語られました。続いて超巨大財閥(ロスチャイルド、ロックフェラー、モルガン)の世界経済への影響力の大きさ、たとえばイングランド銀行、フランス銀行、アメリカの連邦準備銀行が民間銀行であり、それにこれらの財閥が大きな影響力を持っていることを話されました。そののち、後進国の問題、ODAやインフラ改善事業を通じての先進国の収奪について話されました。IMFや世界銀行が後進国に借款をし、それがかえって後進国には負担になり、貧困が増すことになる。一方で、もし、後進国がそれらを拒否する場合は、政治家は政権から追い出されたり、クーデターをしかけられ

たりする。原料資源をもっている国には戦争をしかけられることもある。そののち農業地域の貧困化とその解決策について語られました。アフリカ・アジアの農村が貧困であって、そこから住民が都会へでて、スラムに住み着く、そしてひどい環境の中で生活せざるを得ない。土地改革が一番必要だが、それが現在ではできない、というものでした。

講義の後、ゼミ生から花束が贈呈されました。



学会の奨励賞を受賞しました。

対象となった論文は“Market Diffusion with Consumer-Based Bilateral Learning”です。

この論文では、財・サービスの品質の不確実性が存在する下での市場規模拡大の時間経路を理論的に分析しています。既存研究では、新しい財・サービス市場は価格が下落しながらS字に成長するという現象を生産技術の改善に注目して説明しています。これに対して、受賞論文では消費者と生産者の直面する2種類の不確実性によっても説明できることを明らかにしました。

この賞は応用経済学分野において優れた研究成果を発表し、将来の研究発展の基礎をなす貢献をした日本応用経済学会の正会員に与えられるたいへん名誉な賞です。11月26日に開催された日本応用経済学会において授賞式が行われました。

松浦君がFP2級の資格を取得



経済学部3年の松浦佑樹君がFP(ファイナンシャル・プランナー) 2級の試験に見事合格しました。1月16日に鏡味学部長から表彰され、奨励金5万円を受賞しました。

FPは、金融、不動産、税金などの知識を用い、資産運用などの家計のライフプランを提案するアドバイザーです。この資格は国家資格で、FP2級は、なかなか取得が難しい資格です。金融機関ではこの資格の取得が必須に近いものとなっています。

経済学部では、エクステンションセンターでFP2級、宅地建物取引責任者の講座を受講し、試験に合格した学生に対し、エクステンションセンターの受講料全額を奨励金として給付しています。

3.

学生からのメッセージ

経済学部 経済学科 4年 西谷晃成(帯広大谷高校出身)

『SCANに参加して』

私は、専門ゼミを通じてSCAN(スキャン)という活動に参加しました。SCANは、学生が主体となって企画・運営する研究報告会であり、釧路と札幌圏の大学から多数のゼミが参加しています(2011年度は5大学から11ゼミ、



96名が参加)。この取り組みは、2010年度に釧路公立大学の学生が発起し、運営の中心を担っています。2011年度から札幌支部が設けられ、私達のゼミがそれを担当しています。

私達は、支部として中間報告会の実施や企業等への協賛依頼等を行うと共に、研究報告に向けてヒアリング調査やデータ分析等に取り組みました。正直なところ、つらい時期や苦勞したこともありましたが、ゼミの仲間や周囲の友達に支えられ、やり遂げることができました。

また、このような活動を通じて他大学の学生と交流ができたことは、貴重な経験となりました。特に、報告本番後の懇親会では、釧路の皆さんと深い親睦を得ることができました。頑張ったからこそ、互いに絆を深められたのだと思います。今は、この活動参加することができて本当に良かったと思います。

経済学部 経済学科 4年 荻原宏康(遠軽高校出身)
『地域再生活動を通して』

私たち、平澤ゼミナールは、昨年8月に札幌市から約30分の場所にある、自然豊かな「長沼町」に、1泊2日で町をあげての地域おこしとして行われている“グリーンツーリズム”を体験・調査して来ました。

この活動は、長沼町の農家の方々が、農業を体験したことが無い子供たちを対象(主に修学旅行生)に、農業を1つの架け橋として、人と人との繋がりを深め、農業を、そして北海道を知って体験してもらおうと共に、心の癒しが感じられる新たな取り組みだと私は感じました。

また、実際に農家の方のお宅に泊らせていただくことで、現地の人の貴重なお話や、体験をさせて頂くことが出来ました。

この体験を、これからの人生に、そして就職活動に、活かしていきたいです。そして、誰よりも大好きな北海道が、このような取り組みによって活性化されていってほしいと、心から願っています。

新任教員紹介

今年度新たに二人の先生が経済学部にて赴任されました。簡単なプロフィールを紹介します。



大場 隆広(おおば たかひろ)先生

東京大学大学院 経済学研究科 経済史専攻 博士課程 修了博士(経済学)

一言! 私の専門分野は日本経済史で、戦後の中学卒・高校卒労働者が製造現場で果たした役割について研究しています。授業を通して、日本経済の歴史や現在の諸問題を理解し、将来の日本を背負う人材にふさわしい教養・見識を身につけてもらいたいと思っています。



佐々木 達(ささき とおる)先生

東北大学大学院理学研究科地学専攻博士課程修了博士(理学)

一言! 本学では地域経済論を担当しています。どうして経済現象は場所によって異なるのか、という問題を扱っています。地域の発展や衰退のメカニズム、その原動力を実際にフィールドに出かけて調査してみませんか?

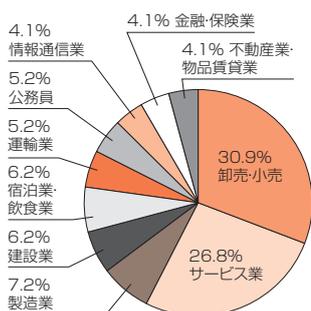
経済学部の主な内定先

金融・保険業	北洋銀行、北海道銀行、みちのく銀行、札幌信用金庫、旭川信用金庫、帯広信用金庫、釧路信用金庫、北海信用金庫、網走信用金庫、大地みらい信用金庫、室蘭信用金庫、北海道労働金庫、札幌中央信用組合、空知商工信用組合
卸・小売業	イオン、スズケン、ツルハ、ホームマック、ほくやく、アインファーマシーズ、サッポロドラッグストア、ヨドバシカメラ、ヤマダ電機、ベスト電器、コープさっぽろ、北海道リコー、アレフ、ムラタ、富士メガネ、北海道ゼロックス、イオン北海道、大丸藤井
建設・不動産	ミサワホーム北海道、積水ハウス、東日本ハウス、明和地所、住友不動産販売、北海道セキスイハイム
製造業	バイエル薬品、日本ペーリンガーインゲルハイム、伊藤ハムデイリー、マキタ、日本ケミファ、日本食研、ナガワ、六花亭製菓、日本デジタル研究所、トーモク、きのとや
運輸・情報通信業	日本通運、北海道旅客鉄道、東日本旅客鉄道、JALグランドサービス、ソフトバンクモバイル、ナラサキスタックス、佐川急便、東日本電信電話、ANA千歳空港株式会社
サービス業	カナモト、ホクレン農業協同組合連合会、セコム、リクルート、日本郵政株式会社、カラカミ観光、加森観光、共成レンテム、北日本広告社、北海道中小企業同友会、ペイロール
公務員	道内市町村職員(札幌市役所(一般事務、消防)、深川市役所、士別市役所など)、北海道警察、他都府県警察、自衛隊

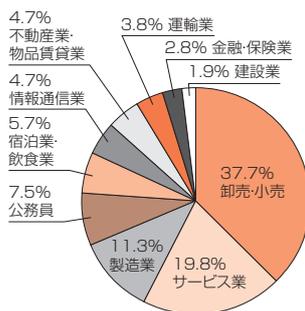
2011年度の就職状況

今年度の就職状況は、昨年度よりも改善しました。経済学部の就職状況を見ると、昨年度と同様に卸売・小売業、サービス業が上位を占めています。今年度は、公務員、製造業の構成比が上がっています。

2010年度(2011年3月末)



2011年度(2012年3月末)



経済学部研究会

日時 6月2日(木) 14:50~18:00
報告者 雨宮 裕樹(大阪大学大学院経済学研究科博士課程後期)
[Information Acquisition for Internal Capital Allocation and Executive Compensation]

報告者 黒阪 健吾(北海道大学大学院経済学研究科博士課程後期・学振特別研究員DC2)
[Duverger's Law in the Laboratory (joint with Yoichi Hizen and Keigo Inukai)]

日時 8月4日(木) 15:00~16:30
報告者 長塚 昌生(大阪大学大学院経済学研究科博士後期課程)
[Neural Mechanism of Seed Money Effect in Charitable Donation]

編集後記

SGU経済学部報 6号 経済学部長 鏡味 秋平

消費税の増税、社会保障と税の一体改革、TPPなど今の国会で採り上げられる問題は、まさしく経済問題といえます。その中で日本経済の不透明感はさらに深まった感じがします。このような問題に触れるにつれ、経済学の重要性が改めて認識されています。本学経済学部が開設されてからはや20年たち、多くの卒業生を出しています。今後も経済学の素養と視点を持ち、社会貢献する人材の育成に努めていきたいと思っています。